

《史料研究》

上智大学編『西洋史上の諸問題 —「西洋の歴史」への補遺—』について
— 一種検定本教科書『西洋の歴史』（1947年）へのカトリック教会の対応 —

茨木 智志

はじめに

本稿は、上智大学編『西洋史上の諸問題 —「西洋の歴史」への補遺—』の紹介を中心に、1947年に発行された一種検定本教科書である『西洋の歴史』へのカトリック教会の対応を、歴史教育史の視点から整理するものである。

上智大学編『西洋史上の諸問題 —「西洋の歴史」への補遺—』（以下、『西洋史上の諸問題』とする）とは、上智大学により作成され、カトリック系の高校に、1948年に配布された本文6頁の冊子である。副題にあるように、『西洋の歴史』（著作兼発行者：中等学校教科書株式会社）という社会科「西洋史」用の一種検定本教科書に対する「補遺」として作られたものであった。本稿では、この『西洋の歴史』へのカトリック教会の1948年度の対応としての『西洋史上の諸問題』を中心とし、あわせて1949年度の対応として、カトリック教会が独自に作成した西洋史（世界史）教科書を取り上げる。

『西洋史上の諸問題』の存在を紹介したのは、佐藤伸雄氏である。佐藤氏は、本文から引用しつつ、当時のカトリック教団の対応を批判的に考察した¹。これは、佐藤氏自身が、1948年度にカトリック系の私立暁星高校（東京都千代田区）3年生であったときに配布された、『西洋史上の諸問題』を利用したものであった²。この佐藤氏の記述をもとに、その存在が社会科教育史に位置づけられてきた³。

史料そのものは、佐藤氏も失くしてしまったということであったが、その後、蔵書から見出した佐藤氏から、筆者は『西洋史上の諸問題』の提供を受け、ここに全文を紹介する次第である（稿末掲載の史料参照）。

¹ 佐藤伸雄『戦後歴史教育論』青木書店、1976年、48～50頁。なお、佐藤氏の執筆以前にも、歴史教科書を回顧する座談会で紹介されたことはあった（「座談会 戦後歴史教科書物語—第二次指導要領改定まで— 歴史教科書とその時代2」『季刊歴史教育研究』第20号、1961年7月）。ここでは、『西洋史上の諸問題』を読んだ松島栄一が非常に批判的に取り上げ、座談会に参加していた佐藤氏が推測される使用学校などを簡単に述べている。

² 「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 佐藤伸雄先生」『歴史教育史研究』第2号、42頁。

³ 片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房、1993年、843頁。

以下、カトリック教会による『西洋の歴史』の問題化、『西洋史上の諸問題』の作成と内容、『世界史 西洋史篇』の発行と使用の順に確認していきたい。

1. カトリック教会による『西洋の歴史 (1)』の問題化

戦後の新学制における教科課程（教育課程）の検討の中で、社会科が誕生する。新制高校では1年次に「社会（一般社会）」5単位を必修とし、2～3年次では「東洋史」「西洋史」「人文地理」「時事問題」各5単位を選択とした。1946年の10月頃から、小中高の社会科の学習指導要領と教科書の作成が始められた。

「東洋史」「西洋史」については、中等学校教科書株式会社に委託され、歴史学の専門家を集めて、占領軍のCIE（民間情報教育局）教育課や文部省と協議をしながら、教科書と学習指導要領の作成が進められた。新制高校は1948年度発足予定であったが、新制高校に移行する予定であった中等学校用に、逸早い完成が目指された。学習指導要領は、東洋史編が1947年7月に、西洋史編が同年10月に発行された⁴。教科書は、各2分冊で発行されることになり、最初に『西洋の歴史 (1)』が1947年8月に発行された⁵。

この『西洋の歴史 (1)』は、カトリック教会からの批判を受けることになる。まず、社会科学学習指導要領での宗教の取り扱いが、1947年9月頃から『カトリック新聞』を舞台にカトリック教会の神父たちからの批判を受けていた⁶。そして、12月に、カトリック教区連盟教学部長で上智大学教授のヨゼフ・ロゲンドルフは、「寒心すべき西洋史教科書/宗教教育と国家 (2) 7」により、『西洋の歴史 (1)』を厳しく批判した⁸。ここでの批判は多岐にわたるが、特に『西洋の歴史 (1)』の次の記述が問題とされた。

今日のわれらは福音書の記事の全部を信ずるわけには行かない（イエスの出生、

⁴ 『学習指導要領 東洋史編 昭和二十二年度』文部省、1947年7月。および、『学習指導要領 西洋史編 昭和二十二年度』文部省、1947年10月。

⁵ 『西洋の歴史 (1)』著作兼発行者：中等学校教科書株式会社、中等学校社会科用 1947年8月3日 文部省検定、同日発行。

⁶ 次のようなものがあつた。「宗教をどう教えるか/社会科の学習指導にご注意」『カトリック新聞』1041号、1947年9月28日。「危険を蔵す社会科学学習指導要領/教師の世界観が問題/「科学的態度」に警戒を要す」『カトリック新聞』1047号、1947年11月16日。「はたして違憲か/問題の社会科指導要領」『カトリック新聞』1048号、1947年11月23日。ヨゼフ・ロゲンドルフ「カード箱に捕われる官僚/宗教教育は官吏に委せたくない/宗教教育と国家 (1)」『カトリック新聞』1051号、1947年12月14日。

⁷ ヨゼフ・ロゲンドルフ「寒心すべき西洋史教科書/宗教教育と国家 (2)」『カトリック新聞』1052号、1947年12月21日。

⁸ ロゲンドルフによる批判とは別に、カトリック司祭である佐々木鉄治の「論壇 新教科書「西洋の歴史」の批判」(『聲』第843号、1947年)がある。佐々木はカトリック教会の立場から『西洋の歴史』のキリスト教記述を激烈に批判している(執筆日は1947年11月18日)。

行った奇せき、死後の復活)。しかし当時においてはこれがそのままに信ぜられたのであって、これが同時に初期のキリスト教徒をして勇敢な伝道者とし、死を恐れぬ殉教者としたのである。(『西洋の歴史 (1)』、62 頁)

この部分は、第3節「キリスト教の勝利」の中の「イエスの生がい」という小見出しで記述された最後の箇所である。ここでは、イエスの生涯について福音書に基づいて24行にわたって詳述した後に、1行落として、注記のような形で、4行で記載されたものであった。基本的に、教科書において聖書を伝説として扱ったことが、カトリック教会の神父の立場から問題とされている。

これ以前の1947年11月25日と12月1日に、ロゲンドルフは『西洋の歴史 (1)』の記述に関して、CIEの宗教課と教育課に抗議をしていた⁹。この抗議が、占領軍の中で、どのように対応されたのかは確認できていない。ただし、翌1948年1月になって、米国のカトリック信者からの抗議の手紙が、連合軍総司令官のマッカーサー元帥に届けられ、問題は急に大きくなった¹⁰。カトリックの信者であり、次期の米国大統領選挙を目指していたマッカーサーにとっては、由々しき出来事であった。占領軍からの削除指示が日本語ではなされずに印刷されたのが原因であること¹¹、この教科書は1948年3月以降に使用されないことなどを内容とする、CIE局長からの覚書がマッカーサーに提出され、マッカーサーから、著者と出版社は懲戒された等の旨を述べた回答の手紙が米国に送られて、事態は一応の決着を見た。

実際には、日本側に実質的な処罰を受けた者はなく、『西洋の歴史 (1)』は1948年3月以降もそのまま使用されていた¹²。とはいえ、その後、キリスト教の取扱いに過敏

⁹ Report of Conference, 25 Nov. 1947, CI&E, GHQ/SCAP Records, [CIE(C)00400] 国立国会図書館憲政資料室 (以後、Report of Conference 等については、年月日とシート番号のみを記載する)。および、Report of Conference, 1 Dec. 1947, [CIE(A)03067]。特に1947年11月25日では、本文に引用した部分を問題としている。

¹⁰ マッカーサーや米国を巻き込んだ『西洋の歴史 (1)』の記述の問題については、西鋭夫『マッカーサーの『犯罪』 秘録日本占領』上巻 (日本工業新聞社、1983年、44～45頁。Toshio Nishi, *Unconditional Democracy: Education and Politics in Occupied Japan, 1945-1952* Hoover Institution Press, 2004 (first printing 1982), pp. 44-45) が詳しい。この間の経緯やその後の占領軍の対応については、拙稿「世界史教育の成立過程に関する一考察」(1986年、筑波大学提出修士論文、131～135頁) が取り上げ、さらに、片上宗二・前掲『日本社会科成立史研究』(842～845頁) が詳細に考察している。また、当時、文部省で中等社会科に関係していた勝田守一は、「こういう問題もあったことをこの機会にのべておきたい」として、簡単に触れている (勝田守一「戦後における社会科の出発」家永三郎他著『岩波講座現代教育学』第12巻、岩波書店、1961年、59～60頁)。

¹¹ 執筆者の板倉勝正が、CIE教育課のボールスからの削除の指示を受けて、英文原稿のみを削除して、日本語原稿をそのままにしたことが原因であった (板倉勝正「『西洋の歴史』を書いた頃」『白門』第28巻第6号、1976年6月、47～48頁)。板倉自身は、「知らない人は何か抵抗めいたことを感じたかもしれないが、私はただ面倒臭いから要求はされたが訂正しなかつただけのことである」と、後日に述べている (同前、48頁)。

¹² 「座談会 戦後教科書物語—検定制度発足まで—」『季刊歴史教育研究』第19号、1961年4月、7

とも言える対応を取ったCIEにより、すでに完成していた『西洋の歴史 (2)』は発行できず、加えて、『東洋の歴史 (1)』『東洋の歴史 (2)』も発行されずに終わることになった¹³。

2. 『西洋史上の諸問題』の作成と内容

(1) 『西洋史上の諸問題』の作成

以上のように、『西洋の歴史 (1)』の記述の問題は、政治的には解決した。しかし、カトリック教会にとっては、何の解決にもなっていなかったと思われる。それは、カトリック系の高校でも、この教科書を使用せざるを得なかったからである。そのため、作成されたのが、上智大学編『西洋史上の諸問題』であった。

「上智大学編」とあるだけで、具体的な執筆者は、現時点で不明である。また、発行年月日の記載もない。作成時期については、上記の経緯を勘案すると、1948年に入った頃から、遅くとも4月の新学期に間に合わせるべく急遽、作業が進められたと考えられる。一般的に新制高校の内容の程度が揺れ動いていた時期であるとはいえ、さらに『西洋の歴史』の「補遺」と言いながら、新制高校の生徒向けとはいえない文章になっている。また、誤植も散見される。非常に急いで執筆し、印刷したことが推測される。

作成された『西洋史上の諸問題』は、カトリック系の高校に配布された。前述したように、本稿で利用したのは、佐藤伸雄氏所蔵の『西洋史上の諸問題』である。佐藤氏は1948年度の暁星高校3年生であったときに¹⁴、これを受け取り、自分の『西洋の歴史 (1)』教科書の表紙の裏に挟み込んで保存していた。配布されたカトリック系の高校全体の中で、『西洋史上の諸問題』が、『西洋の歴史』の「補遺」として、どのように使用されたのは、明確ではない¹⁵。

『西洋史上の諸問題』の基本的な内容は、副題の通りに『西洋の歴史 (1)』の「補遺」である。『西洋の歴史 (1)』での該当頁と項目名を示して、その「補遺」として説明を記載している。具体的には、以下の4項目である。

～9頁。

¹³ 1949年4月に「世界史」が実施されてからも、占領軍と文部省は、これらの発行を目指して原稿の修正作業を継続していたが、結局のところ発行には至らなかった。その間の経緯は、拙稿「成立期における高校社会科「世界史」の特徴に関する一考察 ―科目の設置と文部行政による対応に焦点を当てて―」(『社会科研究』第72号、2010年、17頁)を参照されたい。

¹⁴ 佐藤伸雄氏は1948年3月に旧制の暁星中学5年生を卒業し、同年4月に新制の暁星高校3年生となり、翌1949年3月に卒業した(前掲「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 佐藤伸雄先生」、42頁)。

¹⁵ 佐藤伸雄氏は、修道士の若手の先生が、人類の誕生に関するところのことを、「この本(『西洋史上の諸問題』)よりも進化論のほうが合理的だ」と教室で言われたことは覚えていますが、と回想している(前掲「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 佐藤伸雄先生」、42頁)。

人類の起源 キリストの勝利 教会の世俗勢力 近世史序説

この4項目は、前述のロゲンドルフ著の「寒心すべき西洋史教科書」による批判の箇所、おおむね該当している。「補遺」としての説明であるためか、各項目の『西洋の歴史 (1)』での位置づけは、節に当る部分、節の下の子項目の部分、編の序文に当る部分という具合に、統一されていない。ただし、全4編で構成される『西洋の歴史 (1)』の各編において、「補遺」を設定している（表を参照）。

表：『西洋史上の諸問題』の内容と『西洋の歴史 (1)』での目次上での位置

『西洋史上の諸問題』に記載の各項目	左記項目の『西洋の歴史 (1)』での目次上の位置づけ
六―七頁 人類の起源	第一編 文明の起原と発達 第一章 先史時代 <u>人類の起原</u>
六〇―六三頁 キリストの勝利	第二編 古典文明（ギリシア及びローマ） 第五章 ローマ帝国（31B. C. —395A. D.） 第三節 <u>キリスト教の勝利</u>
七九―八〇頁 教会の世俗勢力	第三編 西欧世界の形成―中世世界の展開 第二章 中世西欧世界の完成 第二節 カトリック教会の権威 <u>教会の世俗的勢力</u>
一〇八頁 近世史序説	第四編 人間精神の解放と世界の拡大 <u>序説</u>

注1：上智大学編『西洋史上の諸問題―「西洋の歴史」への補遺―』と『西洋の歴史 (1)』（著作兼発行者：中等学校教科書株式会社、中等学校社会科用 1947 年 8 月 3 日文部省検定、同日発行）により作成。

注2：『西洋の歴史 (1)』で該当する箇所を下線で示した。表記の違い等は原文のままである。

(2) 『西洋史上の諸問題』の内容

以下、『西洋の歴史 (1)』での該当箇所の記述に対して、『西洋史上の諸問題』がどのように記述しているのかを簡単に確認しておきたい（以下、本文中での引用の注記を省略した）。

まず、『西洋の歴史 (1)』の「第一編 文明の起原と発達」における「人類の起原」の項目に「補遺」を加えている。「人類の起原」の書かれている「第一章 先史時代」は、「先史・原史・歴史」「人類の起原」「旧石器時代」「新石器時代」の各項目で構成されており、次の「第二章 古代東方（オリエント）」に続いている。

『西洋の歴史 (1)』の「人類の起原」では、次のようなことが説明されている。①「人類の祖型動物が霊長類から分かれて、人類としての生活を営み始めた」時期は不明ながら、第四紀にはすでに存在しており、「化石人類」が各地で発掘されている。ただし、現生人類の直接の祖先ではないと考えられている。②「人類の動物界からの分離」として、重要なのは「火の利用」と「道具の製作」である。その間に、人類は「直立するに至り」、「骨格の変化が起ってここに人間が生まれ出た」。さらに「火の利用」は、様々な大きな役割を果たしてきた。③さらに重要なものは、「伝統と進歩」をもたらした「言語」である。「言語」こそは、「人間を社会的動物たらしめた最大のもの」であった。

ここには、進化という言葉は使用されていないが、当時の研究状況に基づいて進化論による人類の起源そして火や言語による人間の誕生が説明されている。

これに対して、『西洋史上の諸問題』の「人類の起源」では、次のように説明されている。①人間は、動物界に由来しない存在であり、人間の霊魂は卓越している。②動物は火を恐れる。そのため、「猿人」が偶然に火を見て利用し、火を起こすようになったという説は、「不可能な空想」である。③「人類史の最初の事実は、人間が地上に出現したこと、とその最初の活動であつて、その起源ではない」。そのため、人間の起源を論ずることは、「歴史の教科書の問題ではない」。

基本として、進化論に基づく人類の起源に対する説明の内容および説明の存在そのものへの批判を展開している。

次に、『西洋の歴史 (1)』の「第二編 古典文明 (ギリシア及びローマ)」の「第五章 ローマ帝国 (31B. C. —395A. D.)」における「第三節 キリスト教の勝利」に、「補遺」を加えている。「第五章 ローマ帝国」は、「第一節 帝政期のローマとその滅亡」「第二節 ローマの文化」「第三節 キリスト教の勝利」の各節で構成されている。その中の「第三節 キリスト教の勝利」は、「ユダヤ教」「イエスの生がい」「イエスの教え」「キリスト教の伝ば」「迫害」「神学」の各項目で構成されている。

『西洋の歴史 (1)』の「キリスト教の勝利」では、次のようなことが説明されている。①ユダヤ人の中にメシア思想が生まれた。②福音書によるイエスの生涯の出来事とこれが当時において信じられたこと。③「山上の垂訓」を代表とするイエスの教えの概略。④ローマ帝国でキリスト教が伝播され、いくどか迫害を受けたが、後に公認された。そして教義が統一され、国教化された。

基本的には、キリスト教の始まりからローマ帝国での国教化までのキリスト教の歴史が簡潔に叙述されている。それまでの日本での西洋史教科書での記述と異なり、上記②のところで、福音書に基づいたイエスの生涯を比較的詳細に述べたことが特色である。そのためか、その記述の前と後ろに、福音書とその内容に関わる説明が付加されている。後ろの部分においては、先に引用したように、福音書の内容がその当時はそのまま信じられたことを、注記のような形で説明をした。一方で、前の部分においては、次のように書かれている。

かれ〔イエス：引用者注〕の生がいと教えは新約聖書の最初の四編即ち四福音書（マタイ伝・マルコ伝・ルカ伝・ヨハネ伝）に記されている。いずれもかれの死後に書かれたもので、イエスの名はローマの歴史には全く知られず、ただ後世のキリスト教と迫害の歴史にその伝説的教組として記載されているにすぎない。これはイエスの伝道がわずかに一年であり、単なる地方的な一事件にすぎなかったことと、かれの弟子たちは貧しい教育のない者が多かったことによるのであろう。（『西洋の歴史（1）』、61頁）

そして「福音書に従えば」として、イエスの生涯を紹介している。このような書き方の背景には、敗戦後に国史教科書からの神話の排除が進められていたことがあったと考えられる。

これに対して、『西洋史上の諸問題』では、「キリストの勝利」という「補遺」を加えた。記述の範囲は、『西洋の歴史（1）』とほぼ同じく、「ユダヤ民族」の「救世主」の思想から、ローマ帝国での国教化と異教の禁止までである。基本的にキリスト教の立場からの「イエズス・キリスト」の生涯や教えを中心としたキリスト教の歴史が記載されている。その中で、特に、四福音書については、次のように強調している。

これらのもの〔四福音書：引用者注〕は目撃者の報告であり、さもなくば目撃者の言葉に従って編まれたものなのであるから、その直接性は信憑性を最大限に保証するのに足るのである。この保証を更に強めるものは、編著者達が年齢、身分、性別を異にする他の無数の人と同じく、イエズスに対する信仰を証明するために喜んで生命を献げたという事実である。（『西洋史上の諸問題』、3頁）

この福音書に対する信憑性の保証の強調は、先に引用した『西洋の歴史（1）』での記述に対応したものであろう。『西洋の歴史（1）』の「第三節 キリスト教の勝利」は、ロゲンドルフをはじめ、カトリック教会側から強く批判された部分であった。そのため、『西洋史上の諸問題』の「キリストの勝利」の部分は、「補遺」というよりも全文の差し替えを意図して執筆されたものと考えられる。

次に、『西洋の歴史（1）』における「第三編 西欧世界の形成—中世世界の展開」の「第二章 中世西欧世界の完成」の「第二節 カトリック教会の権威」の中の「教会の世俗的勢力」という項目に、「補遺」を加えている。「第二節 カトリック教会の権威」は、「民衆の教化」「教会の世俗的勢力」「僧侶の文化史上の功績」「修道院運動」の各項目で構成されており、次の「第三節 各種の闘争」に続く。

『西洋の歴史（1）』の「教会の世俗的勢力」では、次のようなことが説明されている。前の項目である「民衆の教化」では、キリスト教の「僧侶」がゲルマンを教化する際に、民衆の中に入り、民衆の心をとらえたことを具体的に説明した。そして「教

会の世俗的勢力」の項目では、次のこと述べている。①キリスト教が全ヨーロッパに広がると、教会の勢力が政治・社会全般にわたって大きな力を持つようになった。②宗教諸侯は軍隊を持ち、戦争に従い、結婚もし、僧職売買の悪風を生じた。③「ローマ法王」の「グレゴリウス七世」はドイツ皇帝と争って、これを支配しようとし、「インノケンチウス三世」は強大な権力を獲得するに至った。

これに対して、『西洋史上の諸問題』では、「教会の世俗勢力」という「補遺」を加えた。ここでは、次のようなことが説明されている。①西欧と中欧のほとんどは、カトリック信仰に帰一し、教会は皇帝や諸侯から土地と権力を贈られたが、聖職売買も行なわれ、「宗教生活の嘆くべき弛緩」となった。②修道院の改革運動が進められ、「叙任権紛争」は、「教皇グレゴリウス七世」が勝利し、教皇「インノシエンチウス三世」は「仲裁者たるの職能」を全ヨーロッパの支配者に発揮した。③「シュタウフェルン家」の皇帝は教皇に対抗したが、没落した。④この間に、東ローマ帝国では、教会は「国家教会」に変わり、東方教会と西方教会の疎遠は、両者の「決定的分離」に至った。⑤「ビザンチン的な国家教会の観念」は東ローマ帝国滅亡とともに終わりを告げたが、ロシアで再興された。

『西洋の歴史 (1)』の「教会の世俗的勢力」では、教会の世俗的「悪風」や「勢力」の記述の延長として、ローマ教皇権の絶頂を記述しているのに対して、『西洋史上の諸問題』の「教会の世俗勢力」記述は、修道院の改革運動などの結果として、ローマ教皇権の絶頂を記述している。そのため、記述の範囲は、『西洋の歴史 (1)』での「教会の世俗的勢力」の項目での記述のみならず、「修道院運動」の項目や東方正教会の記述など、各所に断片的に記載されている事項をまとめて説明する形式にしている。

最後に、『西洋の歴史 (1)』における「第四編 人間精神の解放と世界の拡大」の「序説」に「補遺」を加えている。この場合の「序説」とは、第二編～第四編の最初で、各編の概要を述べた約1頁の序文を指す（第一編にはない）。

「第四編 人間精神の解放と世界の拡大」は、「第一章 文芸復興」「第二章 近代国家の発達」「第三章 アメリカ合衆国の建国」「第四章 18世紀の社会と風潮」の4章で構成され、具体的には、フランス革命の直前までを対象としている。これを「序説」では、「近世前期」と位置づけ、さらに、この時代において「ヨーロッパ人は広い視野を獲得し、それと共に自己の歴史をまことの意味で世界史にまで高めた」のであり、同時に「これまでのような秩序や均衡が失われ、複雑な歴史がくりひろげられ」た、とまとめている。そして、この時代を、「長い間全ヨーロッパの人心を支配していたキリスト教会の権力が弱まり、今までの灰色の調べに代わっていきいきとした個人の行為が、歴史の表面に現われて来た時代」と性格づけている。

これに対して、『西洋史上の諸問題』では、「近世史序説」という「補遺」を加えた。ここでは、ルネサンスという「人間と現世を思惟の中心におく精神的潮流」が起り、この運動は「個人・個性を主張し、行動のあらゆる制限を打破しようとするもの」であり、「巨大な力」を呼び起こしたことで「偉大な成功」をもたらしたことを説明して

いる。そして、「しかしそれは漸次教会と宗教を公的生活から逐い出し、文化と国家を世俗化し」、「科学的・社会的・政治的思惟から神の観念を閉め出すに至った」と結んでいる。『西洋の歴史 (1)』で、キリスト教会すなわちカトリック教会が支配した中世を脱した明るい時代と捉えた「近世史」を、『西洋史上の諸問題』では、カトリック教会の立場から功と罪の両側面を指摘している点が、興味深い。

以上のように、『西洋史上の諸問題』では、『西洋の歴史 (1)』に対するカトリック教会の立場から問題とした箇所について、各編の要点を対象にして、差し替え、もしくは補足を意図した説明が加えられている。カトリック系の中等学校で学ぶ生徒に、『西洋の歴史 (1)』を使用させながら、一部においてその教科書と異なるカトリック教会による西洋史（歴史）の捉え方を「補遺」として示そうとした試みであると見なすことができる。

3. 『世界史 西洋史篇』の発行と使用

(1) 『世界史 西洋史篇』の作成と発行

前述したように、カトリック系の高校では、1948 年度は上智大学編『西洋史上の諸問題』の冊子を「補遺」として配布して、『西洋の歴史 (1)』を使用した。そして、1949 年度に向けて、独自に西洋史の教科書の作成に着手し、次の教科書が発行された。

『世界史 西洋史篇上』、1949 年 4 月 15 日発行、全 155 頁、80 円

『世界史 西洋史篇下』、1949 年 10 月 30 日発行、全 194 頁、100 円

編者：上智大学内教育協議会（代表者：小沢謙二）、発行所：エンデルレ書店

ここでは、『西洋史上の諸問題』に続く、カトリック教会による歴史教育の試みとして、『世界史 西洋史篇』の書誌の概要を確認した上で、その歴史教育史における位置づけをしたい。

『世界史 西洋史篇』が発行される約 1 年前、1948 年 5 月 20 日の『時事通信 内外教育版』第 105 号の「週刊教育ニュース」では、次のように報じている。

カトリック教会で教科書編さん

カトリック教会側では教会の立場から西洋史と生物の新教科書を上智大学ならびにカトリック中学校の協力によつて編さんすることになった。もちろん文部省教科用図書委員会の決定した基準によるもので全カトリック経営の諸学校において使用される。

1948 年 5 月の時点で、カトリック教会がカトリック系の高校用に西洋史教科書編纂を始めたことが報道されている。生物の教科書編纂は、進化論の記述に関わる対応で

あったと推測される¹⁶。

カトリック教会が問題とした『西洋の歴史 (1)』は、前述のように、中等学校教科書株式会社が編集・発行した一種検定本教科書であった。新学制発足当初の教科書の基本は、文部省が作成した文部省著作教科書であった。文部省の担当者を総合的な社会科の学習指導要領と教科書の作成に専念させるために、高校社会科の選択科目である「西洋史」「東洋史」「人文地理」については、中等学校教科書株式会社に委託され、一種検定本教科書として作成された。一種検定本教科書と文部省著作教科書には、このような違いはあったが、使用教科書が一種類に限定されていた状況は同じであった¹⁷。

そのような中で、検定教科書制度が発足する。カトリック教会が、西洋史教科書を独自に作成し、検定に合格させた上で、カトリック系の高校での使用を目指していたことを示している。引用文中の「文部省教科用図書委員会の決定した基準」とは、教科書検定のための「教科用図書検定基準」を指す。ただし、この時点では、各教科目の教科書検定基準は検討の段階にあり、実際に公布されるのは翌年（1949年2月）以降になる。そのため、公布が予定される各教科目の検定基準を念頭に置いての西洋史教科書作成であったと考えられる。

『世界史 西洋史篇』の作成過程に関する情報は、ほとんど見出しえていない。基本的に、奥付に記されているように、小沢謙二を代表として、上智大学内の教育協議会で執筆が進められたと考えられる。小沢謙二は、戦中では教育雑誌の編集者として、戦後は社会科を中心に、体育など非常に幅広く精力的な執筆活動を展開し、またカトリック教会に関わる編集者や執筆者としても名前が出てくる人物である。ただし、その履歴等の詳細は確認できていない¹⁸。

教科書の執筆は遅れがちであったようで、1949年1月に、ロゲンドルフがCIE教育課に相談に行っている¹⁹。原稿の後半が完成していないため、全巻揃いを原則とする検定申請に出願できない状況を説明し、文部省の教科書を使用しないことが可能であるか否かを問うロゲンドルフに対して、CIE教育課から、認可を経た正式な教科書を使用する規定があること、その一方で、補助教材としての何らかの教材の使用は問題でないこと、などが回答されている。

前述したように、1949年2月に教科書検定基準が公布された²⁰。ここでは「東洋史」「西洋史」による基準が公布された。そして、「世界史」による基準が翌3月に「追加」

¹⁶ 教育協議会編『人類と進化 生物2』（エンデルレ書店、1949年）が存在する。

¹⁷ 当時は新聞等も含めて、一般には「国定教科書」と呼ばれることが多かった。

¹⁸ 小沢謙二は、「小沢謙一」としても登場する。両者は同一人物であると推測される。

¹⁹ Report of conference, 19 Jan. 1949, [CIE(A)03085]。

²⁰ 「教科用図書検定基準」1949年2月9日、文部省告示第12号（同日『官報』号外第15号）。

として公布された²¹。「追加」であったため、検定基準の上では、「世界史」と「東洋史」「西洋史」が並列する形になっていた²²。そのため、「世界史」の「西洋史」編という教科書でも申請は可能であったと思われる。ただし、1949年度用の「世界史」の検定教科書は、申請の受付が行われなかった。「世界史」を実施しながら、「世界史」の教科書がない状況において、文部省は、1949年4月の通達で、「教科書として現在刊行されているのは、西洋の歴史（上）のみであるが他は教授者によつて適当に考慮されたい²³」と指示せざるをえなかった。

社会科「西洋史」の検定教科書を予定して作成が始められた『世界史 西洋史篇』は、以上のような状況のもとで、1949年度用には「世界史」の補助教材として発行されることとなった。書名の『世界史 西洋史篇』の中の「世界史」は、1948年10月に発表されて、1949年4月から実施された科目「世界史」に合わせて付けられたものであろう。これまでの経緯から「東洋史篇」はなかったものと考えられる²⁴。

(2) 『世界史 西洋史篇』の使用と検定申請

カトリック教会としては、検定済教科書として正式に『世界史 西洋史篇』をカトリック系の高校で使用する予定であった。しかし、ここで述べたような状況であったため、形式的には補助教材として、実質的には教科書として、『世界史 西洋史篇』を使用したと考えられる。このような「世界史」教科書の使用は、当時において、ごく普通のことであった。これらは、「世界史」準教科書と呼ばれている。すなわち、『世界史 西洋史篇』は、「世界史」準教科書の一つと見なすことができる。

『世界史 西洋史篇』の使用状況の詳細は不明であるが、1949年度にカトリック系の高校で使用されていたことは、間違いがない²⁵。さらに、1950年度使用教科書の検定が1949年度中に行なわれたが、ここでも「世界史」教科書は受け付けられなかった。

²¹ 「教科用図書検定基準」一部改正、1949年3月22日、文部省告示第20号（同日『官報』第6654号）。

²² 1949年11月頃発行と推測される刊行物である『教科用図書検定基準 文部省』では、「東洋史」・「西洋史」と「世界史」の基準が併記されている。なお、この時期の「世界史」教科書検定基準に関しては、拙稿「成立期における「世界史」教科書検定基準に関する基礎的考察」（『歴史教育史研究』第7号、2009年）を参照されたい。

²³ 「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」、1949年4月13日、発教第247号。

²⁴ なお、世界史を東洋史編と西洋史編に分けた教科書は他にも存在した。

²⁵ 当時、カトリック系の六甲高校（兵庫県神戸市）で教師をしていたクラウス・ルーメル氏は、1949年度に急遽、担当した週5時間、1年間の歴史（西洋史）の授業で、この『世界史 西洋史篇』を使用したと回想している（2010年1月22日に聞き取り。東京都練馬区〔以下、同じ〕）。ルーメル氏の回想録（*Von Köln nach Tokyo: Pater Klaus Luhmer SJ- Lebenserinnerungen eines Japanmissionars 1916-2009*, BACHEM, 2009）にある、六甲高校で歴史教師をしたという部分が、このときに当たる（92頁）。なお、筆者が使用状況を問題にするのは、佐藤伸雄・前掲『戦後歴史教育論』で、カトリック「教団の立場からの教科書も編纂されるのだが、特定教団の立場に立つ教科書は認められず、実際に使用されることはなかった」（50頁）と書かれているためである。後に検定は通らなかったが、使用はされたという当時の準教科書の実状把握の難しさを示している。

そのため、1950 年度用の教科書目録でも、一種検定本教科書である『西洋の歴史』『東洋の歴史』が掲載され続けていた²⁶。結果的には、『西洋の歴史』『東洋の歴史』の発行は実現しなかったが、しかし、これはカトリック教会にとって、大きな問題であったと推測される。

その後、1951 年度用の教科書として「世界史」教科書の検定が初めて受け付けられた。1950 年 4 月に発表された結果は、検定申請された 7 種のうち、合格した「世界史」教科書は皆無であった²⁷。このときの検定に、『世界史 西洋史篇』も出願されたと考えられる。すべてが不合格であったこともあり、『世界史 西洋史篇』がなぜ合格しなかったのかは、推測の域を出ない。ただ、基本的に、カトリック教会の立場を強調していた点が、検定に際して問題となった可能性はある²⁸。

「世界史」準教科書としての特徴としては次のような点が指摘できる²⁹。1949 年発行のものとしては、地図や肖像などの図版が充実している。学習を念頭に置いたものになっており、全 43 章の各章末に、一問一答的な多くの「問題」、そして全 6 編の各編末には、論述的ないくつかの「総合問題」が設定されている。「世界史」準教科書の中でも、充実した設問のある教科書であると見なすことができる³⁰。また、当然ながら、カトリック教会の立場からの歴史記述が散見される³¹。ただし、カトリック系の高校といえども、生徒からの大学受験の要求があり、また、教科書検定申請の予定があったため、基本的には、一般的な西洋史教科書から極端に外れた教科書ではなく、さらに、教科書検定基準に則った教科書の編集をそれなりに心がけたものと推測される。

『世界史 西洋史篇』は、「補遺」としての『西洋史上の諸問題』を発展させて、西洋史全体を対象として、カトリック系の高校生のために作成された教科書であった。

²⁶ 『昭和二十四年八月 昭和二十五年度使用 高等学校普通学科用教科書目録』文部省、1949 年 8 月。なお、1947 年度用から 1951 年度用まで、「教科書目録」では『西洋の歴史』『東洋の歴史』が掲載され続けていた。

²⁷ 『時事通信 内外教育版』第 203 号、1950 年 4 月 11 日。

²⁸ ルーメル氏は、カトリック的な性格が強いため認可されなかったと噂では聞いた、と回想し、当時の日本の世界史の常識から離れていると見られたのではと思う、と述べている（2010 年 1 月 22 日に聞き取り）。

²⁹ 他の「世界史」準教科書を含めた全体的な特徴については、拙稿「準教科書に見る初期の世界史教育の模索」（『社会科教育論叢』第 47 集、2010 年）を参照されたい。

³⁰ 「世界史」準教科書の中には、充実した設問に特色のあるものが多かった。この点は、その後の今日までの設問に乏しい「世界史」教科書とは異なる際立った特徴になっている。そのような「世界史」準教科書の中でも、『世界史 西洋史篇』の設問は、数が多く、学習への配慮がなされている教科書であると見なすことができる。ただし、設問を充実させた他の「世界史」準教科書には多い参考文献の記載が、『世界史 西洋史篇』にはない。

³¹ 例えば、「ふつうに用いられる宗教改革という語は実情に適しない」として、「信仰の分裂（宗教革命）」の用語を使用しているなどの例（『世界史 西洋史篇下』、17 頁）が見られる。なお、当時の「西洋史」および「世界史」教科書検定基準では、「宗教改革」の用語が使用されていた。

つまり、特定の生徒を対象とした「世界史」教科書（西洋史教科書）を目指したものであった。結果的には、このような「世界史」教科書が、戦後の教科書検定制度のもとでの文部省検定済教科書となることはなかった。ただし、地方版教科書の試みと同様の性格を持った、ある種の可能性を見出すことはできよう。この時期に展開した「世界史」準教科書が持つ幅の広さを示している。

おわりに

本稿では、一種検定本教科書『西洋の歴史 (1)』へのカトリック教会の対応として、上智大学編『西洋史上の諸問題 ―「西洋の歴史」への補遺―』の紹介を中心に、その展開としての上智大学内教育協議会編『世界史 西洋史篇』の発行と使用までを概観してきた。このような対応の背景には、戦時中におけるカトリック教会への厳しい圧迫、さらには戦後におけるカトリック信者であるマッカーサーの存在など、さまざまな要因が錯綜していたことが推測される。

歴史教育史の視点からは、これまでに述べてきたような位置づけをすることができる。他方で、このような位置づけと同時に、多方面からの考察がさらに加えられる必要があると考える。今後の研究の進展を期待したい。

付記

貴重な史料を提供して下さった佐藤伸雄氏、当時のご自身の体験や様々な情報についてお話を聞かせて下さったクラス・ルーメル氏、関連する当時のカトリック教会や上智大学についてご教示や多くの史料を下さった豊田浩志氏に、厚く御礼を申し上げます。

史料：上智大学編『西洋史上の諸問題 —「西洋の歴史」への補遺—』

凡例

- ・原文は、本文6ページのA5版の冊子である。表紙は横書き、本文は縦書きであるが、すべて横書きとした。
- ・新字体のある漢字は、新字体に直した。割書きで書かれた括弧書きの年代記載の部分は開いた。活字は、すべて同じ大ききで表記した。
- ・不自然な空欄の部分は、「□」と表記した。1箇所ある原文の右側に付された傍点は、文字の上に記載した。
- ・原文でのページを〔第1頁〕〔以下、第2頁〕などと、本文中に記載した。

【表紙】

西洋史上の諸問題
—「西洋の歴史」への補遺—

上智大学編

【本文】

〔第1頁〕

上智大学編

西洋史上の諸問題

—「西洋の歴史」への補遺—

六一七頁 人類の起源

今迄のところ自然科学は人類の起源について何ら確定的なことを知らない。十九世紀中葉以来ヨーロッパ人はジャワとシナで化石した骨格の断片を発見した、そしてそれが今日では一般に人間の骨格であると考えられている。何故かと云えば、真実の人間のみから起りうるところの道具と、火を用いた跡とがその骨格の傍に見出されたからである。かくして既に氷河期に人間は地球上に存在したことになる。この最古の時代に属する発見物が悉く、今日の人間よりも遙かに猿に類似していることは、大いに注目に価いする。このことのほかに別の根拠に基いて、今日多くの学者は人間が少なくとも身体において動物界に由来することが、大いにありうべきことゝ考えている。勿論今に到る迄、人間と動物の中間項をなすものと見らるべき骨格が発見されてはいない。この欠けた項が見出されようという予想は、問題になりえない。何となれば、両者の相違は相互に連繫すべ

からざるもので、人間は全く新たな、独自の生物であるからである。

人間は身体と感官の構造において独特な地位にある。人間の足は本来立つがためのもので、猿における如く、ものを把むようにできていない。即ち人間にとつて直立して歩行することが本然の状態であるのに、猿は四足を用い、唯例外的にだけ後足で歩く、どの動物もその生活様式に適うように、最も合目的な感覚と器官とを備えている、即ち特殊化されている。併し人間には四肢と器官の特殊化が欠けているのである。それ故人間は純粹に生物学的に見れば、あらゆる生物の中で最も〔以下、第2頁〕たよりなく、不安なものであるが、併し理性を持つと云うことによつて、身を守るに足るのである。更に人間は言語をもち、文化を創造するものとして限りなく動物に優越して居り、そして正に特殊化されない感覚がその心的な働きに最もよく合致するのである。それ故人間は全体として動物界に由来するものではあり得ないのである。その靈魂は動物魂（感覚を司さるもの）に卓越し、そしてそれは新たに創造されたものであるということだけが靈魂の現象を説明できるのである。かりに人間の身体が動物に由来するにもせよ、身体は靈魂と結合することによつて、それに適合するように改造されたのである。

もしある学者が、猿人は偶然に自然の火を見、それを利用し、最後には故意に火を起すことを知るに至つたと考えることができるというならば、それは不可能な空想である。何となれば、動物は自然に火を恐れ、それから逃げるからである。火を一定の目的のために用い、おまけに火を起すことを学ぶというのは、原因と結果との関係を認識することであり、それ故必然的に猿人の有しない精神的悟性を前提とするものである。

もとより、人間の起源を論ずることは、歴史の教科書の問題ではない。歴史は人類の生活における事実を問題にする。そして人類史の最初の事実は、人間が地上に出現したこと、とその最初の活動であつて、その起源ではない。

六〇—六三頁 キリストの勝利

皇帝アウグストゥスの治下にキリスト教の開祖、イエズス・キリストが生れた。彼とその宗教の創始とは人類史に深刻な影響を与えている。

イエズスはユダヤ民族から現われたが、この民族には世界^{ミョ}のあらゆる民族の中にあつて、唯一の神（ヤーヴェ）を信ずるものであつた。いかにヤーヴェが全世界と人間とを創造し、而も人間が先祖の墮罪によつて不幸な状態に突き落されたか、又ヤーヴェが同時に、墮罪の後、人類を罪の軛から解放するために救世主（メシア）を約束したか、この民族の聖書に語られている。すべての民族がヤーヴェから離れ、偶像を拝んでいた時、ヤーヴェはイスラエルを己が民族として選び、この民族の中に約束の救世主への希望が生々と保たれていた。ユダヤが敵に侵された時、神はユダヤ人を慰め、メシアへの希望〔以下、第3頁〕を新たにする為、聖人即ち預言者を遣わした。ユダヤの国がローマ人の支配するところとなつた時、メシアへの期待は特に高まつたが、彼等の考えたメシアは何よりもこの国を異邦人の支配から解放し、ユダヤ人を地上最高の民族たらしめるような国民的英雄でなければならなかつた。

この様な情勢の下にイエズスは全く人知れずベトレヘムに生れた。三十歳迄ナザレトの町に大工として暮らし、ついで巡回説教者として公けに活動を始めた。彼は聴く者に向つて、真の回心、道徳的^イ行い、就中敵にも及ぼさるべき普遍的な隣人愛を要求した。彼は權威を持つものとして教えた。まことに彼は自己が約束されたメシアであり、更に神の子であると主張した。病者を癒やしたり、特に死者を甦^イらせたりした奇蹟は上のことに対する証明であつた。

民衆は彼の言葉に喜んで耳を傾けた。何故かといえば、彼は權威と迫力を以つて語り、貧者、病者、迫害を受ける者に対する愛情に心を惹かれたからである。唯、祭司と民族の指導者達は、彼の述べ伝える精神的な神の国が彼等の国家主義的・現世的なメシアへの希望に一致しないがために彼を憎んだ。それ故彼等はイエズスのメシアであることを否定するのみにとどまらず、終に十字架にかけて殺さなければ心が安まらない程であつた。唯、僅かな人々の一群、就中特に十二使徒はイエズスの神たること、メシアの資格を信じ、その耻辱にみちた死さえも、彼等の信仰を動揺させることができなかった。イエズスの死後五十日たつて、彼等は自分達がイエズスの神たることを最もよく証明する復活の事実の証人であると主張し、この信仰のために迫害を忍び、その生命を献げることさえも辞さなかつた。

イエズスの生涯について書かれた最古の史料は新約聖書の諸書、とりわけ四福音書である。これらのものは目撃者の報告であり、さもなくば目撃者の言葉に従つて編まれたものなのであるから、その直接性は信憑性を最大限に保証するのに足るのである。この保証を更に強めるものは、編著者達が年齢、身分、性別を異にする他の無数の人と同じく、イエズスに対する信仰を証明するために喜んで生命を献げたという事実である。

ユダヤ人は最初からキリスト教徒をユダヤ教の背信者と見なし、これを迫害した。ローマ皇帝も三百年の長きに亘つて、火と剣でキリスト教徒を虐待した。彼等は国家の敵、無神論者、冒瀆者、禁止された宗教を信ずる者、秘密結社員、人類の敵と見なされて死刑執行人の手に渡された。この暴虐にも拘らず着々と教徒の数は増加した。迫害はより激しく、より執拗〔以下、第4頁〕に、より残酷かつ一般的になつていつた。しかもディオクレチアヌス帝の如き非人間的な狂暴ささえもキリスト教の堂々たる前進を食い止めることができなかった。終にコンスタチヌス大帝はキリスト教的に宗教の自由を認め（三一三年）、愛顧を与え、終には自身キリスト教に皈依するに至つた。四世紀の終り頃テオドシウス帝はキリスト教を国教と宣し、異教を禁止した。立法と公的生活は漸次キリスト教の精神に侵透され、やがて異教は東、西ローマ帝国から姿を消した。キリスト教は己れに敵対する異教世界に打克ち、世界の相貌を一新した。

七九—八〇頁 教会の世俗勢力

国家と教会の密接な結合の結果、十一世紀の中葉には、西欧及び中欧の殆んど全体がカトリックの信仰に帰一し、教皇をキリスト教の精神的頭首として承認した。フランク族の諸王の援助によつて教会的国家（教皇領）が成立し、教皇は世俗の君主と同じ支配

者と認められた。皇帝と諸王とは競つて教会に土地と権力を贈つたが、その代償として聖職者、とりわけ司教と大修院長の叙任権を要求した。その選任は限らずしも、教会の立場を顧慮せず、教会の重要な地位が金額によつて与えられることも珍らしくなかつた。これを称して聖職売買と云う。^(一) 教皇位を占めることさえ、往々在俗者によつて、またシモニの形で行われたことがある。かかる異常なことの結果は、修道院の戒律と、在俗聖職者の許における宗教生活の嘆くべき弛緩となつた。

修道院の改革運動はフランスのクリュニー修道院から起り、遂次全教会的生活の全般的改革運動、即ちクリュニー派運動へと発展した。世俗的権力者を聖職者に任命すること——所謂在俗者任命——は改革運動者、特に教皇グレゴリウス七世によつて激しく反対された。その結果として彼とハインリヒ四世との間に激しい争い（叙任権紛争）が生じた。これは約五十年間続いた後、教皇の勝利となつて終つた（一〇七六—一一二二）。かくして教皇は更にヨーロッパにおける唯一の指導者となつた。教皇は亦、東ローマ皇帝に援助を求められて、十字軍を催し、西欧のキリスト教徒に回教に対する戦^マに参加することを求めた。中世紀における教皇権の最大の代表者であるインノセンチウス三世（一一九八—一二一六）は事実上仲裁者たるの職能を全ヨーロッパの支配者との間に揮つた。〔以下、第5頁〕

増大する教皇の権力にシュタウフェルン家の皇帝は対抗したが、長い抗争の間に漸次ドイツと北イタリア及び全キリスト教会の同情と、最後には南イタリアの世襲領に対する支配力を失つた。シュタウフェルン家の没落後には、皇帝は殆んど名誉の称号にすぎなくなつた。

ヨーロッパにおいて教皇が教会の自由を守り通して、その権威が一般に認められている間に、東ローマ帝国においては、教会は国家教会に変つていた。皇帝が教会の内部に干渉した時は、屢々一時的にローマから分離することがあつたし、それがたとえ表面上統一しても、長い時代の変遷の中に東方教会と西方教会との疎遠は甚しくなつていつた。この疎遠は特にコンスタンチノーブルの名誉心の強い司教達によつて拍車をかけられた。彼等は教皇に従うことを欲せず、却つてその政治的な考え方において、全教会に対する首位権を要求したのであつた。かくして一〇五四年には東方と西方との決定的分離が生じたのである。

ビザンチンの国家教会の觀念は東ローマ帝国の没落と共に終りをつげた。それはしかし十世紀の終りにビザンチン典礼によるキリスト教を受け入れたロシアに再興された。

一四五三年トルコ人がコンスタンチノーブルを占領し、東ローマ教会の最後の光が消えた時、モスコイ大公イワン四世は自分こそ東ローマ後継者であり、その限り東方教会の唯一の正当な擁護者であると宣言したのである。

(○) Simony, die Sim^マe^マe は魔術者シモン Simon Magns の名から生じた。使徒行録八章、一八—二〇節参照。シモンは按手によつて聖霊の力を伝えることのできる使徒の権力を金で聖ペトロから買わんとした。

近世史は文芸復興運動と共に始まり、十八世紀末のフランス革命に終る。中世紀は全く宗教を中心としていた。それ故すべて現世的なもの、また人間をも永遠者の光の中に眺めていた。十四世紀中葉以来、人間と現世を思惟の中心におく精神的潮流がイタリアに起る。この傾向に身を投じた者は、古代文化を純粹の人間性の最も完全な表現と考え、古代を真剣に研究することによつて、自己の文化理想の実現に努めたので、この文化潮流はルネサンスと呼ばれる。ルネサンスとは即ち、古代文化の復興・再生の意味である。だが実際には古代への沈潜はこの極めて深くかつ広く及んだ運動の一面でしかなく、む〔以下、第6頁〕しろこの運動は個人・個性を主張し、行動のあらゆる制限を打破しようとするものであり、この点で中世紀の社会的・秩序的思惟に対立するものである。

この新しい精神はあらゆる生活領域に抬頭した。即ち芸術においては、個性的なもの、及び内面的に体験されたものを創作的に叙述しようとする。科学においては謎を解き、技術においては発明しようとする。地球の表面については新たな発見を企て、政治においては征服を、経済においては利益を求め、宗教においては外的束縛をまぬがれようとする。

この運動は巨大な力を呼び起し、あらゆる文化領域に驚嘆すべき進歩を見せた。特にそれは富の不斷の増大と、十六世紀中葉以来自然科学と、技術との未曾有の進歩となつた。火薬の発明は軍隊組織に変革を生じ、近代国家の出現を促がした。印刷術、及び銅版と木版の発明は芸術と科学を普及せしめ、新世界と通商路の発見はヨーロツパの地平線を拡張し、新知識を伝え、強大な植民国家を作り出し、旧世界を富ました。そして自然科学の進歩は人間に自然を支配し、利用することを可能ならしめたのである。

現世の強調は自づから宗教的思惟の後退と、文化の漸進的世俗化を意味する。ルターによる旧教会の教権の否定は、宗教の領域における個人主義となり、ローマに対抗するプロテスタント教会の発生となつた。かくて北欧と、部分的には西欧とが教皇の支配を脱し、カトリックにとどまつた国々においても、抬頭する国家主義は絶対的君主の国家教会を生じ、全教会の首長の権を否認するに至つた。

かくの如く、ルネサンスの運動は現実にはヨーロツパの精神史の変革であり、新しい時代の発足を意味する。全く新しい精神が風靡したのである。それは巨大な力を自由に働かしめ、偉大な成功を収めた。しかしそれは漸次教会と宗教を公的生活から逐い出し、文化と国家を世俗化した。そして科学的・社会的・政治的思惟から神の観念を閉め出すに至つたのである。